



イラクの実情を確かめるべく、  
現地入りした池上さん

〈特別企画〉

# 池上彰さん イラクをゆく

外務省の渡航情報によると、イラクの多くの地域は「退避勧告・渡航延期」区域に指定されている。「しかし、実態はどうか。この目で確かめたい」。ジャーナリストの池上彰さんが、この夏、気温50度に達する灼熱のイラクを訪問。首都バグダッド、南部のバスラ、北部のクルド自治区を回った。

(地図は8ページを参照)



アラビア湾沖に浮かぶ原油輸出の拠点バスラ・オイルターミナル

## 特集 イラク 復興、そして成長へ

この二十数年間で、3度もの戦争を経験してきたイラク。

日本では“戦争”のイメージが強いが、  
明るい兆しが見え始めていることも事実だ。

ここ数年で治安は徐々に回復し、  
なにより世界第3位といわれる原油埋蔵量を誇り、  
マーケットも大きいイラクの将来性には、  
日本をはじめ、世界の国々が注目している。

復興、そして成長に向けて一。

2003年、日本は50億ドルの支援を表明。  
JICAは、円借款や技術協力などを通じて、国づくりの土台となる  
基礎インフラ分野を中心に支援を展開してきた。  
その先に描くのは、イラク経済の発展と人々が安心できる暮らし。  
そして、企業活動の活性化につなげたいという思いだ。

### 地域により治安に格差 国全体が危ないわけではない

——2010年8月、アメリカのオバマ大統領によって正式にイラク戦争の終結が宣言されてから1年余り。その後のイラク情勢は日本でもあまり報道されなくなり、時々届くニュースは自爆テロなどの暗い話が多い。実際はどうなのでしょう？

**池上** 首都バグダッドではテロや外国人の襲撃・誘拐などが依然として起きています。私の滞在中も、厳重な警備で守られているはずの「グリーンゾーン」と呼ばれる約10平方キロの安全地帯に外からロケット弾が撃ち込まれました。移動時は防弾チョッキに防弾車。

イラク国内でも特に発展が進むクルド自治区の都市エルビル。治安の安定で外国企業の進出も増え、街は多くの人々で活気付いている



そして終始、民間警備会社の警護が必要でした。

しかし、イラク全土が危険というわけではなく、地域によって治安の差が格段にあるのです。北部に広がるクルド自治区の都市エルビルは、基本的には自由に出歩いて大丈夫。建設ラッシュに沸き、夜11時まで営業している大型ショッピングセンターもありました。まさに「ミニ・ドバイ」といった雰囲気。ヨーロッパから飛行機で4〜5時間で時差もほとんどなく、日本か



外貨収入を得ていくかということ。  
原油精製の一拠点であるバストラ製油所では、とても喜ばしい光景を見ました。70年代に建てられたという精製プラントが2基稼働していました。なんとその1基が日本製。「新潟鐵工所」のロゴマークが付いていたのです。し

港では戦中に沈んでしまった船や海底にたまった土砂の除去によって日本の支援によって行



日本の円借款で整備が進むウナム・カスル港とバストラ製油所を視察した池上さん。製油所では、約40年前に建てられた日本企業のプラントが健在だった様子に感激。作業員たちの日本への期待感も感じた



## イラクが発展すると日本経済のプラスになる!?

——3度にわたる戦争で経済活動はストップし、運輸・電力関連施設などの基礎インフラも壊滅状態。イラクではいまだに一日の約半分が停電や断水になることもあるという。戦後復興、そして今後の経済再建に向けて重要なこととは何でしょうか？

**池上** イラクにはほぼ全土にわたって油田・ガス田が広がり、その規模は世界有数です。これだけ見ても、発展のポテンシャルが高いことは言うまでもありません。ただ一方で、産油国でありながらガソリンは輸入に頼っている。つまり、原油の精製能力が低い故に、ポテンシャルを十分に生かしきれないのです。イラクがこれから乗り越えなくてはいけない課題は、原油をどう「使えるエネルギー」にして、

本邦の援助で新しいプラントが建設される予定です。また、バストラ沖のオイルターミナルの拡充が円借款を通じて進んでおり、これが完成すれば原油輸出量は倍増します。さらに物流活性のための拠点として、ウナム・カスル

重要なポイントです。

かも、ポロポロで何とか稼働できている状態のもう一方のプラントに対し、新潟鐵工所のプラントは80年に一度戦争で破壊されたのですが、91年に再稼働。今でもしっかり動き続ける日本製プラントへの作業員たちの絶賛ぶりから、イラクの人々がどれだけ日本の技術に厚い信頼を寄せているかが分かりました。

われていきます。国内向けの原油の精製能力が向上し、その分の原油輸出量も拡大すれば、国際的なガソリン価格の高騰を抑える効果がある。イラク経済の発展や国民の所得増加につながることはもちろん、イラクを含む中東から石油の約9割を輸入している日本の経済への効果もあります。

イラクへの援助が、日本にとってもプラスになる。まさに「情けは他人のためならず」です。日本の原油調達先が多角化すること

ら香港に行くような感覚でしょうか。オーストリア航空とルフトハンザ航空の定期便が飛んでいるんですね。海外からの投資も入ってきていて、日本のトヨタ自動車や日産自動車、ソニーの製品なども見かけました。

われわれはイラクをひとくくりにしたがる。ですが、北と南で民族、宗教の雰囲気や全く異なります。つまり多様性のある国として、イラクを見る必要があると思うのです。

## かつて1万人もいた日本人 両国の知られざる関係

——多くの日本人が抱いているイラクのイメージと違い、国内で最も治安が安定しているというクルド自治区。バグダッドや他の地域とここまで状況が異なるのはなぜでしょうか。

**池上** クルド自治区は、名前の通りクルド人の自治地域。中央政府から自治が認められています。しかし、長年ア



毒ガス兵器の投下によって約5,000人もの人々が犠牲となったハラブジャ事件。博物館でその事実を目の当たりにした池上さんは、「このような悲劇が二度と起きないように」と祈るような思いで展示を見て回った。黒の慰霊碑に刻まれているのは、犠牲者一人一人の名前

ン・イラク戦争末期の1988年、悲劇が起こりました。クルド人はイランと通じている、そう疑ったフセイン大統領（当時）が毒ガス兵器を空から投下し、約5000人の命が失われたといわれています。こうした惨劇の歴史を忘れないために、ハラブジャに建設された博物館には当時を再現した壁画や立体模型が展示されています。被害に遭った子どもたちを荷台に乗せて運んだピックアップ・トラックも、そのままの形で残されていました。日本ではほとんど知られていない出来事ですが、地元の人々は原爆投下と同じ悲劇を経験した日本に対して親近感を抱いており、ハラブジャは「イラクのヒロシマ」とも呼ばれています。そして今年の広島での原爆祈念式典には、ハラブジャ市の関係者も出席したそうです。

また日本との関係で言うと、エルビルで医療支援を行っているNGOの女性看護師からうれしい話を聞きました。自分が日本人だと分かると、タクシーの運転手が料金を受け取らなかつたというのです。「日本人はいいやだから」と。わずか3カ月の滞在の間に、何人ものタクシー運転手です。それだけ日本人に対して好感を持ってきているということです。平和だった70年代、イラクには多くの日本企業が進出。1万人以上の日本人が住んで